

道徳の時間の指導の充実 —資料の提示と発問の工夫を通して—

豊見城市立とよみ小学校教諭 大城 仁 美

I テーマ設定の理由

児童を取り巻く状況	<p>今日的課題から</p> <p>今日、目まぐるしく社会情勢が変化する中で、家庭や地域の教育力の低下、児童の心の荒廃、人間関係の希薄化など、児童を取り巻く環境は決して明るいものとは言えない。そのような状況の中で、児童に夢と希望を与え、豊かな心や他の人と強調しながら自立的に生きることのできる実践力を育てようとする道徳教育は、教育活動の根幹をなす極めて重要な役割を担っている。今回の新学習指導要領の改訂においても、道徳教育の充実が強調されている。</p>
道徳の時間を要として	<p>道徳教育の要となる道徳の時間においては、資料との関わりや教師と児童及び児童相互の関わりなどを通して、児童自らが、自分自身への問いかけを深めていく。その中で、自らの成長を実感することができ、自己や社会の未来に夢や希望をもち、意欲的に生きていくための力を身に付けていくことが出来るのである。そのため、一人一人がねらいとする道徳的な価値について真剣に考え、道徳的価値を主体的に自覚し、実践力をつけていくため、道徳の時間の指導をより充実したものにしなければならない。</p>
道徳的価値や人間としての生き方の自覚が不十分	<p>これまでの実践から</p> <p>これまでの実践では、副読本の読み物資料を中心に授業を展開してきた。資料を分割して提示したり、役割演技を取り入れたりする中で、児童は楽しく授業に取り組んでいた。しかし、授業の中での発言が一部の児童に偏ったり、多様な考えが引き出せなかった。そのため、道徳的価値の自覚は深まらず、道徳の時間の充実につながらなかった。その理由として、資料を基に児童の思いや考え（本音）を出させたり、多様な考え（道徳的価値）を出させ、ねらいにせまるような発問が曖昧だったことが考えられる。また、資料の中に児童を引き込む提示の仕方がワンパターンになったりしたため、資料を通してねらいとする道徳的価値に気づかせることができなかつたことがあげられる。</p> <p>これらのことから、道徳の時間において道徳的実践力を育成するためには、道徳の時間の充実のために、授業改善が必要である。</p>
資料の提示の工夫	<p>本研究において</p> <p>道徳の時間の指導においては、資料が中心となる。児童は、資料の中の主人公などの気持ちや考えを通して価値を主体的に自覚し、自己の生き方を深めていく。資料の中で自分の今までの経験や体験を重ねながら、他の児童との話し合いを通して道徳的価値に気づき考えを深めていく。そのため本研究では、資料の世界にいかにか児童を引き込むか、提示の工夫を図っていく。また、児童の考えや思い、迷いなどを多様に引き出す発問を構成し、授業を展開していく。そのことによって、今まで児童が生活の中で培ってきた、ものごとに対する見方・考え方が、道徳の時間の中でよりよいもの見方・考え方に変わっていくと考える。</p>
発問の工夫	<p>以上のことから、自分のこととして捉えられるよう資料の提示を工夫し、多様な思いや考え、悩みを出させる発問の工夫を工夫した授業を実践することによって、道徳の時間の指導を充実させること考え、本テーマを設定した。</p>

II 研究の目標

道徳の時間の充実のために資料の提示と発問の仕方に焦点をあて、学習指導案の作成と授業実践を行い、授業の工夫・改善を図る。

III 研究の方法

1 資料の提示の工夫

資料との関わりを通して、児童は自己を見つめる事から、児童の興味・関心を高め学習意欲を喚起し、内容の理解を深め、自分のこととしてとらえられるよう資料の提示の工夫を図る。

2 発問の工夫

児童は、資料を通して自分の考えや思い、迷いなどを持ち、教師と児童、児童と児童との関わりの中からよりよい生き方を見つけ出していく。そこで、一人一人の思いや考え、迷いなどを多様に引き出す発問を工夫していく。

3 学習指導案を作成し授業実践をする

1つの資料を2学級で実践する。1回目の授業の評価をもとに、2回目の授業改善を行い、道徳の時間の指導の充実を図る。

IV 研究の内容

1 道徳の時間の指導の充実について

道徳の時間の目標は、道徳的実践力の育成であり、道徳の時間では、道徳的価値の自覚を深め、自己の生き方についての考えを深めていくことが求められる。

そのため教師は、児童に資料を通して、道徳的価値を知らせ、自己の生き方についての考えが深められるよう、道徳の時間の指導の充実を図らなければならない。指導を充実させるには、まず、児童の実態に合った資料の選定と資料の分析・解釈が重要である。そして、

実際の授業では、資料を効果的に提示したり、板書を工夫したり、話し合いを深めたり、表現活動を促すなど多様な指導の工夫が必要になる。

本研究においては、道徳の時間の指導の充実につながる指導の工夫の中から、資料の提示と発問の仕方に焦点をあてた指導案を作成する。作成した指導案を授業実践し、工夫・改善を図り、道徳の時間の指導の充実を図る。

2 資料の提示の工夫

(1) 資料提示について

道徳の時間における資料の提示は、児童を資料の世界に引き込む重要なきっかけとなる。方法としては、教師による読み聞かせが一般的に行われている。その際には、教師による表現の工夫を凝らした提示ができる。読み物資料では、読むスピードや声の大きさ、抑揚など教師の感情を込めた読み聞かせが重要である。また、場に応じて教師が演技や動作などを交え、児童の想像力をかき立てることも有効である。

他に表1のような工夫の例もあげられる。提示の工夫は、特に低学年において、理解

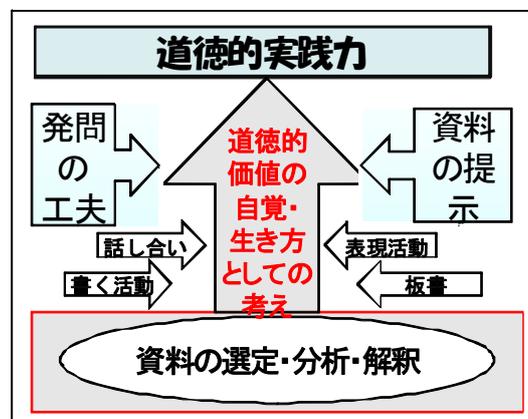


図1 道徳の時間の指導の充実構想図

表1 提示の工夫の例

- 紙芝居
- 切り抜き絵、人形やペーパーサート等を生かす
- 音声や音楽の効果を生かす
- ビデオや写真などの映像
- 資料を分割する
- 再現構成法など

の手助けになり効果的である。また、分割提示や再現構成法（「語り聞かせ」により児童が資料の出来事のイメージを膨らませながら再現し、構成していく方法）は、児童の学習意欲を喚起し、道徳的価値について考えを深めるのに有効である。

(2) 資料の多様な展開について

資料の授業での活かし方についても、例えば、主人公の心情を共感的に追う展開だけでなく**表2**のように、感動を大切にしたり展開や問題解決的な展開などを考えられる。資料の持つ内容によって多様な展開の工夫ができる。

表2 資料の多様な生かし方

- 登場人物への共感を中心とした展開・・・共感資料
- 資料への感動を大切に展開・・・感動資料
- 問題解決的な思考を重視した展開・・・葛藤資料
- 登場人物の行為から学ぶ展開・・・範例的資料

本研究においては、資料に対して児童が興味・関心を高め学習意欲を喚起し、内容の理解を深め、自分のこととしてとらえられるように、資料の提示で視覚に訴えるような紙芝居や切り抜き絵、ビデオなどを工夫し、展開では、資料の内容に合わせて分割提示や再現構成法などの工夫を図った授業を実践していく。

2 発問の工夫

(1) 道徳の時間の発問について

教師による発問は、児童の思考や話し合いを深める重要な鍵となる。発問によって、児童の問題意識や疑問などが生み出され、多様な感じ方や考え方が引き出される。そのためにも、児童の意識の流れを予想し、それに沿った発問や考える必要性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問などを心がけることが大切である。発問の分類として**表3**にまとめる。

表3 発問の分類

基本発問

基本的な発問

ねらいにせまるために欠くことのできない発問、他の発問をもってしては、かえることのできない発問で、授業の骨組みにあたる発問。数は3～4が適当

- ①事実認識を問う発問（省いても良い）
- ②主人公や登場人物の生き方、感じ方や考え方を問う発問
- ③本時のねらいである価値に関わる発問
- ④最後のまとめの段階での発問

中心発問

中心的な発問

基本的な発問の中で、ねらいを達成するために、特に重要な発問。自らの心に問いかけ自らを語らせる発問。中心資料を扱う段階では、1つ又は2つ。

資料の中では、主人公等が今までの自分を振り返り、新たな生き方や考え方に気づき、行動に移したりというような場がこれらに当てはまる

●中心発問の条件

- ・児童が主体的に考えることができ、多様な価値観を出させるものであること。
- ・自我関与を高め、自己の本音や心情を語らせるものであること。
- ・児童の興味や関心を刺激し、意識を集中させるものであること。
- ・この資料、このねらいで扱うとき欠いてはならない発問であること。
(ねらいの決め手となり、ポイントとなる発問)
- ・資料の文章では答えられない発問であること。
- ・模範解答では答えられない発問であること。

補助発問

補助的な発問

基本的な発問，中心的な発問を補ったり，基本的な発問へ導いたり発展させたりする発問。つまり，問いの不明確さを補う発問で展開や話し合いを活性化させ，促進させる発問である。

(2) 指導過程における発問について

道徳の授業における基本発問や中心発問を効果的にするためには，指導過程での発問をどのように工夫すればいいのかを考える必要がある。表4にその工夫例を示す。

表4 指導過程における発問

指導過程における発問

展開	指導過程	発問の工夫
導入	<ul style="list-style-type: none"> ねらいとする価値への方向付け (気づく・振り返る) 意識化・共通化・焦点化 	<ul style="list-style-type: none"> ねらいとする価値への方向付けをする発問 興味・関心を引くような意外性のある発問 どのような方法でここを扱うかは，児童の実態やその使用する資料の特性によって異なってくる。
展開	前段 <ul style="list-style-type: none"> ねらいとする価値の中心資料における追求，把握 (考える・深める・とらえる) 深化・分析・追求・主体化 	<ul style="list-style-type: none"> 資料中の主人公の道徳的行為や考え方，感じ方を追求を追求するための発問 多様な価値観を引き出す発問 道徳的心情を問う場合 「主人公は，どんなことを考えたでしょう」 道徳的判断を問う場合 「どうして」「どっち」「なぜ」のように価値選択を迫る発問 道徳的意欲や態度を問う場合 「主人公はどんなことを心がけたのでしょうか」
	後段 <ul style="list-style-type: none"> ねらいとする価値の一般化 (理解する・わかる・広げる) 一般化・納得化 	<ul style="list-style-type: none"> 自己を見つめさせる発問 「自分はその事についてどうであったか」 価値の主體的自覚を図る発問の工夫 「主人公の気持ちになったことは，ありませんか」
終末	<ul style="list-style-type: none"> ねらいとする価値の整理・まとめ 意欲化・態度化・実践化 (高める・めざす) 	<ul style="list-style-type: none"> 実践への意欲を高める発問 「主人公のような気持ちを大切にしよう」 「わかったね」と押しついたり「勉強したんだからやだよ」とか実践を強要することは避けるようにする。

本研究においては，指導過程の展開の中での発問の工夫を図る。道徳の時間においては，資料を中心に話し合いが行われることから，資料分析をもとに発問を構成していく。まず，ねらいに迫るために中心発問をどこで，どのように問うかを考える。次に，ねらいにせまるため欠くことのできない基本発問を考える。最後に基本的発問，中心発問を補ったり，導いたり発展させたりする補助発問を考える。

また，資料の内容に合わせ道徳的心情を問うのか，判断を問うのか，意欲や態度を問うのか，多様な価値観を引き出す発問を組み立てていく。

このような発問の工夫を通して，児童一人一人の思いや迷い，考えなどを多様に引き出し，ねらいにせまることのできる授業実践を行う。

V 研究の実際

道徳の時間の指導の工夫・改善の手立てとして①資料の提示，②発問の工夫を位置づけた指導案を作成し，授業を実践する。それぞれの資料において1回目の授業の評価を生かし，2回目の授業で改善を図っていく。

1 授業実践計画

回	内 容	学級	①資料の提示	②発問の工夫	評価方法
1	ほんとうの友だち (信頼・友情) 葛藤資料	3組	・登場人物の顔 ・2分割	・葛藤場面で中心発問をうつ (道徳的判断を問う)	授業観察 発言 ワークシート 自己評価
2		4組			
3	お母さんの請求書 (家庭愛)共感資料	2組	・場面絵	・道徳的心情を問う。	
4		3組			
5	青い空 (公德心) 範例的資料	2組	・場面絵 ・写真	・主人公の心情が高まった場面で中心発問をする。(心情)	
6		3組			
7	畑にうめたたから もの (勤労) 共感資料	4組	・場面絵 ・登場人物の顔	・児童からの発言を切り返して補助発問をする。	
8		3組			
9	金の小鳥 (思いやり・親切) 感動資料	1組	・一枚絵 ・切り絵	・中心発問の後にゆさぶりの補助発問をする。	
10		3組			
11	ヒキガエルとロバ (動植物・自然愛護) 共感資料	4組	・紙芝居	・心情が高まった場面で中心発問をうつ。(心情を問う)	
12		3組			
13	幸せの王子 (敬け ん) 感動資料	4組	・ビデオ	・初発の感想から発問を構成する。	
14		3組			

2 授業実践例 ① (12/14)

- (1) 主題名 動植物にやさしく (共感資料)
- (2) 資料名 ヒキガエルとロバ
- (3) 資料観 (省略) (4) 児童観 (省略)
- (5) 指導観

12月に行った実践授業では、児童の興味・関心を高め、学習意欲を喚起するために、資料の提示の工夫を図ってきた。結果として、場面絵や切り絵などを使うことで、資料への理解が深まり、児童の興味・関心を引き真剣に授業に取り組むことがわかった。また、資料によっては、分割して提示したり、語り(再現構成法)で読み聞かせをした方が、児童が真剣に自分のこととしてとらえられることも分かった。

発問の工夫としては、児童の多様な思いや考え、悩みなどを出させるために、ねらいにせまる中心発問をどこで、どう組んでいくか工夫した授業を実践した。中心発問だけでなく基本発問も大事で、発問を組む際には授業者の資料分析や資料解釈が重要なことがわかった。また、児童の多様な思いや考え、悩みなどを出すために、切り返しやゆさぶりなどの補助発問が必要なこともわかった。

そこで、この資料においては、まず、資料の提示として、紙芝居を使った資料の読み聞かせを行う。発問の工夫としては、児童の感想を出させ、そこから発問を組んでいく。また、主人公の気持ちに共感させるために補助発問をし、中心発問でねらいにせまる多様な思いや考えなどを出させていきたい。

(6) 本時の学習 (2回目)

① 本時のねらい

生命あるものすべてを慈しみ、身近な動植物にやさしく接しようとする心情を育てる。

② 手立てや指導のポイント

○ 資料の提示

- ・紙芝居を使って読み聞かせを行い、資料に対する興味・関心を高め、内容の理解を深める。
- ・板書に4枚の紙芝居を使う。
- ※1回目は、3枚の紙芝居を提示したが、思考の流れが切れてしまった。

○ 発問の工夫

- ・初発の感想を聞き、それを基にして発問を組んでいくことで、多様な思いや考えなどが出る。
- ※1回目は、話の筋にそった発問を考えたが、多様な思いや考えは出なかった。
- ・中心発問でねらいにせまる多様な思いや考えなどを出すために補助発問をする。

(7) 本時の展開

過程	学習活動と発問と予想される児童の反応 ☆資料の提示 ◎発問の工夫	指導上の留意点 ☆手立てに関する評価 (評価方法)
導入 5分	1 アンケートの結果や写真を見て生き物について話し合う。 ・アンケートの結果を見て感想を発表して下さい。	・生き物に対する興味・関心を持たせ、自分たちの実態として生き物への思いを確認する。
展開 前段 25分	2 資料を聞いて話し合う。 ☆紙芝居を使って読み聞かせをする。 ◎児童の感想から発問を組んでいく。 このお話をきいて、心に残ったことはなんですか。(基本発問) ・ヒキガエルに悪いことをしたな・なんで、ロバはひかなかったんだろう。 ヒキガエルに石を投げつけているとき、アドルフたちは、どんな気持ちだったでしょう。(基本発問) ・気持ち悪いなあ ・楽しいな ・当てたらおもしろいぞ ◎補助発問をする。 みんなもそういうことがあった? (補助発問①) ・ぼくも生き物をいじめたことがある。 荷車を引いてきたロバが、ヒキガエルの前で止まったとき、アドルフ達はどんなことを考えたでしょう。(基本発問) ・ヒキカエルのやつもうすぐひかれるぞ・こっちの方がおもしろそうだ。 ◎補助発問をする。 ロバとヒキガエルは、どんな話をしているのでしょうか。(補助発問②) ・こんなに傷ついてかわいそう ・助けてあげるよ ・ありがとう、ロバさん。助かるよ。 ◎主人公の変容に焦点を当てた中心発問 くぼみの中のヒキガエルと、遠ざかっていくロバの姿を見つめながら、アドルフ達はどんなことを考えたでしょう。(中心発問) ・もう、生きものはいじめないようにしよう。 ・あんなにヒキガエルをいじめなければよかった。 ・ロバは自分も苦しいのになんてやさしいだろう。	☆資料の話真剣に、聞いている。(観察) ☆主体的に学習に参加し、多様な思いや考えを出すことができる。(発言・観察) ・児童の感想を大きく分け、まとめることで発問を組んでいく。 ・ヒキガエルの命に無頓着な子どもたちの気持ちを明らかにする。 ・おもしろ半分に見ているアドルフ達の気持ちと、自分も苦しい立場にありながら、ヒキガエルを助けようとするロバの気持ちを対比させる。 ・自分の思いや考えを出させるためにペアで役割演技をする。  ☆ねらいにせまる多様な思いや考えなどが出る。(発言) ・ヒキガエルを助けてうれしそうに帰って行くロバを見つめる子どもたちが、どんな気持ちになったかを深く考えさせる。

展開後段 10分	3 自分たちの生活について振り返る。 今日の学習を振り返って、思ったことや考えたことを書きましょう。 (基本発問)	・生きものの命について、これまでのことを振り返りながら考えたことや、これからの生活について書く。
終末	4 教師の説話を聞く。	・生きものにやさしく接しようとする大切さや、命の大切さについての話をする。

(8) 本時の評価と次時の改善点

資料の提示について

紙芝居で提示
↓
興味・関心が高まる

① 教師の観察から

資料は紙芝居にして読み聞かせをした。児童は、教師のめくる紙芝居を食い入るように見つめ、一つ一つの場面の話を真剣に聞いていた。さらに紙芝居の絵を掲示資料として板書に使った。1回目の実践では掲示資料を3枚使ったが、児童の中には話が分かりづらくなってしまうことがあった。2回目の実践では、4枚を掲示し展開した。その時には、児童が、分かりやすくとらえることができ、主人公の気持ちになって考えることができた。

② 児童の自己評価から

図1「資料の内容理解」に対する児童の自己評価の結果である。「よくわかった」「わかった」と答えた児童が92%（1回目）と97%（2回目）で、ほとんどの児童が資料がか分かりやすかったと答えている。紙芝居での提示で、内容を理解し自分の経験を振り返りながら、より身近なこととして自分自身を見つめることができたといえる。

図2は、「主人公の気持ちになって考えることができたか」に対する自己評価の結果である。「よくできた」「できた」と答えた児童が88%（1回目）と92%（2回目）である。ほとんどの児童が資料の中の主人公を通して、自分自身を見つめることができたといえる。

以上のことから、紙芝居による資料の提示や板書での提示により、児童は学習意欲を喚起し、内容の理解を深め、資料を通して自分自身の内面を見つめることができたといえる。

③ 課題

一度の読み聞かせで全員に内容を理解させ、より深く主人公の気持ちに浸らせるための工夫が必要である。

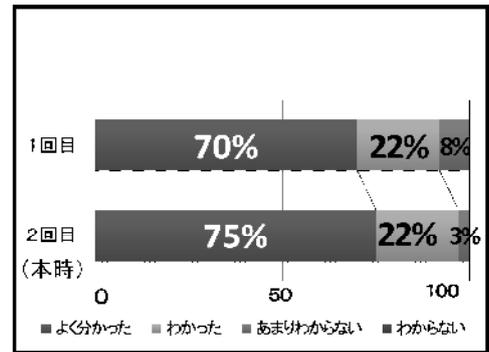


図1 資料の内容理解 (3人)

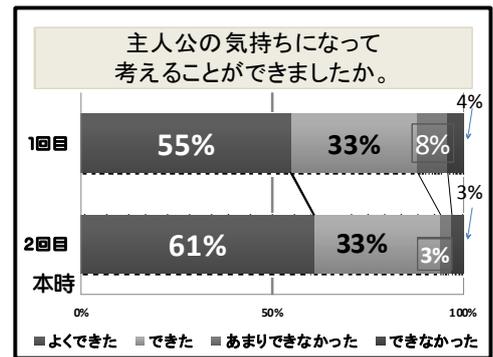


図2 主人公の気持ちになれたか (3人)

改善点：紙芝居を読む時にヒキガエルとロバが見つめ合う場面で一度立ち止まって、考えさせる間を置く。

発問の工夫について

① 初発の感想からの発問の組み立て

1回目の実践では、話の筋にそった基本発問をした。反省として、児童の多様な思いや考え、迷いなどが本音として素直に出なかった。そこで、2回目の実践では、初発の感想から発問を組み立てた。最初の基本発問では、発問と感想を関わらせながら問うことができた。自分たちの感想が活かされているということで意欲的に参加し、あまり発表しない子も発言する姿が見られた。主人公を通して、自分の本音として思いを出すことができた。

初発からの感想への発問

② 中心発問と補助発問

中心発問を主人公のやった行為を考えさせることで、ねらいにせまることができる考えた。

1回目の実践では、中心発問の前に補助発問を1つした。その時には、自分のこととしてとらえることができず、中心発問では、多様な思いや考えなどは出なかった。

2回目の実践では、2つの補助発問をした。1つ目の補助発問では、自分の体験を思い起こさせ、自分のこととしてとらえられるようにした。その時の児童の発言の様子を資料1に示す。2つ目の補助発問では、ペアでヒキガエルとロバになって、それぞれの気持ちを話し合わせた。この2つの補助発問をした後、中心発問をした。中心発問での児童の発言の様子を以下に示す。

T:ヒキガエルに石を投げているとき、アドルフ達はどうな気持ちだったでしょう。(基本発問)

C1:おもしろいな。

C2:楽しいな。

C3:当たったら、うれしい。

T:みんなにも、そんなことがあった?(補助発問①)

C4:かべに石を当てていたら、虫がいて、その虫に当てようと、友だちとやったことがある。
(体験の想起)

資料1 授業での発言の様子

2つの補助発問

T:くぼみの中のヒキガエルと、遠ざかっていくロバの姿を見つめながら、アドルフたちはどんなことを考えたでしょう(中心発問)。

C1:ヒキガエルはひかれると思ったのに、ロバはよけていた。ぼくたちは、なんてことをしたんだろう。

C2:ヒキガエルに石を投げて、悪かった。

C3:どうして、ロバはヒキガエルをひかなかったんだろう。

T:あなたは、どうしてだと思いの?(補助発問)

C3:同じ生きもので、仲間だから。

C4:ロバは優しいなあ。なのに、僕たちは・・・僕たちが間違えていた。

T:何が間違えだと思いの?(補助発問)

C4:自分が嫌いだからと言って石を投げて、いじめたこと。

C5:自分がされたら嫌なのに、してしまった。いじめちゃいけない。

中心発問での深まり

児童の発言から、アドルフ達自身に対する気持ち、ロバに対する気持ち、ヒキガエルに対する気持ちがそれぞれ出てきた。また、児童の発言を切り返すことで、児童の考えを深めることができた。

身近な体験と重ねる補助発問をし、ロバやヒキガエルの気持ちを考えさせることで、中心発問において、ねらいにせまる多様な思いや考えを出すことができたと考える。

③ 課題

児童の感想を活かして感想と発問を関連づけた授業展開が最後まで出来なかった。一問一答になり、決まった子だけの発言になっていた。

改善点:児童の思いやこだわりを実態としてとらえたうえで、教師がそれを見逃さず発言からひろっていき、他の児童にも広げていくよう補助発問をする。

3 授業実践例 ② (2/14)

- (1) 主題名 本当のともだち (葛藤資料)
 (2) 資料名 友だち
 (3) 資料観 (省略) (4) 児童観 (省略) (5) 指導観 (省略)
 (6) 本時の学習
 ① 本時のねらい
 友だちと互いに理解し、信頼し、助け合おうとする心情を育てる。
 ② 手立て
 ○ 資料の提示
 ・登場人物の顔を使って資料を提示、葛藤場面で分割する
 ○ 発問の工夫
 ・葛藤場面で児童の多様な思いや考えを出させた後で、おじいさんの言葉から中心発問をたて、ねらいとする道徳的価値にせまる(1回目は葛藤場面で中心発問)。
 (7) 本時の展開

過程	学習活動と発問と予想される児童の反応 ☆資料の提示 ◎発問の工夫	指導上の留意点 ☆手立てに関する評価 (評価方法)
導入	1 自分が「友達」だと考える人の顔を思い浮かべる。 あなたは「友だち」というと誰の顔を思い浮かべますか？	・具体的な名前や友達の数を発表するのではなく、静かに「友達」について思い浮かべるようにする。
展開 前段	2 資料の前半を読んで話し合う。 ☆登場人物の顔を使い、黒板を使って読み聞かせをする。 カミナリじいさんから逃げてきた二人はどんな気持ちだったでしょう (基本発問)。 ・逃げるのができてよかった ・ひでとしは心配だけど、引き返したくない。 二人は空き地でどんなことを考えたでしょう (基本発問)。 ◎補助発問をする。 二人は、どうしたのでしょうか (補助発問)。 ・ひき返して一緒に謝ろうかな。 ・ひでとしには悪いけど、このままにげよう。 3 資料の後半を読んで話し合う。 ◎おじいさんの発言からねらいにせまる、中心発問をする。 カミナリじいさんが話した「友だちはいいもんじゃな、大切にせにゃいかんぞ」とはどんな気持ちから言ったのでしょうか (中心発問)。 ・自分のことだけでなく、友だちのことも考えるのが友だちなんだ。 ・友だちはこれからも大切にしたいな。	☆資料の話を真剣に聞いている。 (授業観察)  ・あわてて逃げ出してきた二人の心情について考えさせる。 ・グループでの話し合いを取り入れ、迷っている気持ち(葛藤している気持ち)を深めさせる。 ☆ねらいにせまる多様な思いや考えが出る (発言・ワークシート)。 ・カミナリじいさんの話から、自分たちの良心に基づき、友達のことを考えて判断することの大切さに気づかせる。
展開 後段	4 友達について今までのことについて振り返る。 今日の学習をふりかえって、友だちについて思ったことや考えたことを書きましよう。	・導入でふれた友だちについて思い出させ、本当の友だちについて考えさせる。
結	5 本当の友達ということについて教師の説話を聞く。	・実践への意欲づけをする。

(8) 本時の評価と次時への改善点

資料の提示について

登場人物の顔
2分割の提示
↓
積極的に参加
自分のことと
してとらえる

① 教師の観察から

資料の提示の工夫として、登場人物の顔を二つの表情が使えるようにした。児童は、よそ見することなく真剣に話を聞いていた。また、資料を分割して提示したら、前半の話が終わった後、「この後、どうなるの?」と児童が聞きたがり、興味・関心を持って、積極的に授業に参加していた。「自分ならどうしていたか」と自分のこととして考える児童の姿も見られた。

② 児童の自己評価から

葛藤場面で資料を中断し、分割して提示したことは、資料への興味・関心を高め、「自分ならどうしただろう」と自分の体験と結びつけながら振り返り、考えることができた。

図3は、「資料の内容理解」に対する児童の自己評価の結果である。「よくわかった」「まあまあわかった」と答えた児童が**97%**（1回目）と**100%**（2回目）で、ほとんどの児童が資料がわかりやすかったと答えている。

図4は、「主人公の気持ちになって考えることができたか」に対する自己評価の結果である。「よくできた」「できた」と答えた児童が**91%**（1回目）と**94%**（2回目）である。資料の中の主人公を通して自分自身を見つめることができたと言える。

以上のことから登場人物の顔を使った資料の提示と分割提示により、児童が興味・関心を持ち、学習意欲を喚起し、内容の理解を深めることができたといえる。

③ 課題

主人公の気持ちになって考えることはできたが、より深く迷いや悩みなど葛藤する心情を感じ取るための提示の工夫が必要。

改善点：登場人物の関係を押さえ、板書での揭示の工夫や、展開の中で話を補足する。

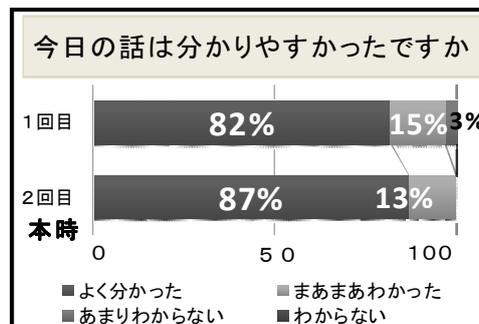


図3 資料の内容理解 (32人)

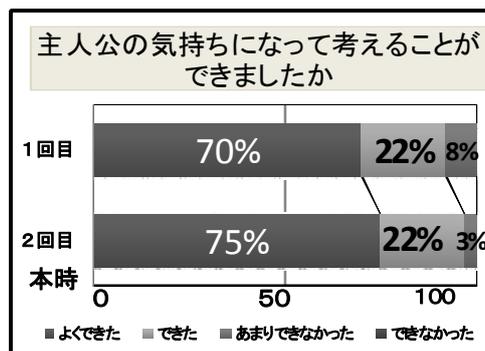


図4 主人公の気持ちになれたか (32人)

発問の工夫について

① 中心発問について

1回目の実践では、中心発問を葛藤場面での自分たちがやった行為について問うこととした。そこでは、行動だけの話し合いに終わり、ねらいにせまることが浅くなってしまった。そこで2回目の実践では、中心発問を後半の話を読み終えた後にした。自分たちがやった行為に対するおじいさんの言葉から「本当の友だち」について、考えさせることでねらいにせまることができた。

② 教師の観察と児童の自己評価から

葛藤場面で資料を中断し、「自分ならどうしたか」その理由をグループで話し合わせた。そこで、主人公を通して自分の本音を出すことで、中心発問では、ねらいにせまることができた。発言の様子を次ページに示す。

T:カミナリじいさんが話した「友だちはいいもんじゃな、たいせつにせにやいかんぞ」とは、どんなことでしょう。(中心発問)

C1:友だちのことを考えて、あやまること。

C2:ひでとしといっしょにやったんだから、自分だけ逃げるのはよくない。

T:自分だけ逃げるのはよくないって、どういうことかな。(補助発問)

C2:ひでとしのことも考えること。

C3:自分だけじゃなく友だちのことも考えるのが、本当の友だち。

C4:遊ぶだけじゃなくて、助けてくれるのも友だちだと思う。

C5:だから、おじいさんは怒らなかったんだと思う。・・・・・・・・・・。

また、下記のようにワークシートからもねらいにせまる記述がみられた。

○友だちは、仲よく遊んでくれる人だけじゃなくて、怒られたときに自分たちが逃げて友だちだけが怒られてはいけないんだなと思いました。遊んだり、助け合ったりすることが大事なんだなあとと思いました。

○私は、友だちに対する気持ちなども大切なんだなと思いました。友だちは、いつも自分のことを思っているから自分も友だちのことを思いたい。友だちが優しいからぼくも優しくしたい。これからも、友だちのことを助けたり、遊んだり 仲良くしたり、やさしくしたいです。

児童はこれまで、ただ遊ぶ関係だけで友だちだと思っていたが、友だちというのは、自分だけのことを考えるのではなくて、友だちのこと(相手のこと)も考えてお互いに助け合ったりすることが大事なんだというねらいに気づくことができた。

以上のことから、葛藤場面で判断を聞く補助発問をすることで、自分の思いや考えを多様に出し合い、中心発問でねらいにせまることができた。

③ 課題

中心発問で、ねらいにせまることはできたが、葛藤場面での思いや迷いを深く感じ取らせ、自分のこととして考えを深めることができなかった。

改善点：葛藤場面での全体の話し合いで、児童から出てきた発言を拾い、ねらいにせまれるよう切り返しなどの補助発問をする。

4 他の授業実践例

他の5つの資料についての授業実践例を以下の表でまとめる。資料の提示と発問について、1回目の授業実践での評価をもとに2回目の授業実践の改善を図った。

また、12月の授業実践の評価をもとに、1月の授業実践では特に、発問での改善を行った。

12月の授業実践

「本当の友だち」(信頼・友情) 葛藤資料については、前述しているので省略

資料名	回	資料の提示	○成果	●改善点	発問	☆成果	★改善点
(家庭愛) 共感資料	1	場面絵 ○興味・関心を高め内容の理解が深まった。 ●資料をそのまま提示した。話を真剣に聞けなくなった児童がいた。			中心発問「お母さんの請求書を見たときの心情」 ☆中心場面での心情が高まった。 ★お母さんに対する気持ちは出たが、それが家族全体までは広がらなかった。		
	2	お母さんの請求書を空欄 ○児童の学習意欲を喚起し、発言が活発になった。			中心発問での児童の発言「家族の一員」という言葉を切り返す。 ☆ねらいにせまることができた。		
	考察	・請求書を空欄で提示すると、自分のこととして考え、話し合いも活発になる。			・教師はねらいをしっかりとおさえ、児童の発言から切り返していくとより、深くせまることができる。		

(公徳心) 青空 範例的資料	1	場面絵・写真・一読 ○導入では、関心を高めることができた。 ●話し合いでは、児童の関心が薄れ、道徳的価値について考えが深まらなかった。	中心発問「善い行いをした後のすがすがしい気持ち」 (道徳的心情を問う) ★発言が広がらず、多様な思いや考えが出なかった。
	2	場面絵・写真・語り(再現構成法) ○学習意欲を喚起し、自分のこととして考えを深めることができた。	中心発問「主人公の変容が見られた場面」 (道徳的判断を問う) ☆ねらいにせまる多様な思いや考え、迷いが出た。
	考察	・範例的資料を扱う場合は、読み聞かせでの一読より語り(再現構成法)の方が学習意欲を喚起し、考えを深めていける。	・中心発問を主人公の変容が大きい場面で問うと、児童の本音として多様に思いや考え、迷いが出る。
成果と改善点	○資料の提示を工夫することで、児童の興味関心を高め、学習意欲を喚起し、道徳的価値について考えを深めることができた。 ●他の資料の提示の方法の実践	☆ねらいをしっかりと押さえ、中心発問をし、児童の発言を切り返していくとねらいに深くせまることができる。 ★児童の思いや考え、迷いを出すためには、補助発問も必要である。補助発問をどう組んでいくか。	

1月の授業実践

「ヒキガエルとロバ」(動植物愛護) 共感資料については、前述しているので省略

資料名	回	資料の提示	○成果	●改善点	発問	☆成果	★改善点
(勤労) 共感資料 畑にうめた宝もの	1	場面絵・登場人物の顔 ○興味関心を高め、学習意欲を喚起した。 ●内容を理解できず、思いや考えが出ない児童がいた。			中心発問「たくさんのお作物がとれたときの気持ち」 ★発問が分かりにくく、児童が何を問われているかわからない。		
	2	場面絵と顔を板書に活かす ○児童の思考が整理され、道徳的価値に対する考えが深まった。			中心発問「お父さんの気持ちを問う」 ○児童の発言から切り返す補助発問をすると、価値が深まり、多様な思いや考えが出た。		
	考察	・板書に、場面絵や登場人物の顔を提示することで、児童の理解を深め、道徳的価値についての考えを深めていける。			・誰の気持ちを中心にするか、資料分析が大事。 ・児童の発言から切り返す補助発問をすることで、道徳的価値に深まりが見られる。		
(思いやり・親切) 感動資料 金の小鳥	1	黒板全体を使った一枚絵・切り絵 ○資料に引き込まれ、興味関心が高まった。 ●資料の提示と話との流れが悪く、内容の理解が浅くなった。			中心発問「イチョウの木に励まされた北風の子の気持ち」 ★児童の発言が少なく、多様な思いは出なかった。		
	2	資料の提示と話の流れを合わせる ○内容を理解し、考えを深めることができた。 ●児童の発言を板書で活かす工夫が必要。			中心発問の前に児童の心情を揺さぶる補助発問 ○中心発問での発言が深まった。 ★初発の感想とを関連させて発問をすると、もっと多様に思いが出せるのではないかと。		
	考察	・黒板を使って資料を提示し、児童の発言を板書の掲示と合わせまとめていくと、道徳的価値について考えを深めていける。			・児童の心情を揺さぶる補助発問をすると、児童の思いや考えを多様にらせ、ねらいにせまれる。		
(敬けん) 感動資料 幸福の王子	1	ビデオ教材 ○興味関心を高め、内容を理解することができた。 ●最後の場面は、ねらいからずれてしまう。			中心発問「話の筋に沿って発問する」 ★中心発問が曖昧で、感動に浸れなかった。感想を話し合わせてみるのはどうか。		
	2	最後の場面をカット ○道徳的価値についての考えを深めていくことができた。			中心発問「初発の感想からを話し合わせる」 ☆多様な思いや考えを出すことができた。		
	考察	・ビデオなどの視聴覚教材を使う場合は、前もって視聴し、効果的に使えるように工夫する。			・発問は、筋に沿ってたてるより、児童の感想から話し合っていくほうが、多様に思いや考えを出すことができ、道徳的価値が深まる。		

成果と改善点	○感動資料での、ビデオや一枚絵は興味関心を高め、感動に浸らせることで道徳的価値についての考えを深めていける。 ●効果的な板書への提示の活用方法	○児童の思いやこだわりとしての実態を把握し、補助発問をすると、多様な思いや考え、悩みなどが生まれ、道徳的価値が深まる。 ●一人一人の児童の実態をしっかり把握した、道徳の時間の発問の授業実践
--------	--	---

VI 研究のまとめ

本研究においては、道徳の時間の指導の充実を図るため、資料の提示と発問を工夫した授業を繰り返し行い、授業改善を図った。実践の結果(授業実践例①と②, 4 その他の授業実践例)をもとにして実践研究で分かったことをまとめる。また、児童の変容については、授業実践の事前(10月)と事後(2月)のアンケートの結果からまとめる。

1 資料の提示と発問の工夫から

資料の提示の工夫では、資料の内容によって提示の仕方を工夫することが大事であることが分かった。実践で分かったことを以下の表にまとめる。

資料による提示の工夫

共感資料	<ul style="list-style-type: none"> 場面絵を使った教師の読み聞かせをすると、児童の興味・関心が高まり、学習意欲が喚起される。 話の筋に沿って場面絵や登場人物の顔を板書に提示し、授業を展開すると、内容の理解が深めることができる。 主人公の心情を追いながら展開すると、自分のこれまでの体験と比べ、自分を見つめることができた。
範例的資料	<ul style="list-style-type: none"> 最後まで話を一読し、話し合うより、語り(再現構成法)の方が、深くねらいにせまることができる。
葛藤資料	<ul style="list-style-type: none"> 葛藤場面で分割して提示すると葛藤場面で心情が高まり、自分の中にある思いに気づくことができる。 自分のこととして深くとらえさせるためには、分割提示がよい。
感動資料	<ul style="list-style-type: none"> 黒板を使い臨場感を出したり、ビデオを使った提示をすると、児童は、資料の話に浸り感動することができる。

資料の内容を活かした提示の工夫すると、児童の興味・関心が高まり、内容を理解し自分のこととしてとらえることができることが分かった。

発問の工夫では、資料分析をもとに中心発問、基本発問、補助発問を構成すると、児童はねらいとする価値を理解し、自分のこととして考えることができることが分かった。

特に、一人一人の児童が道徳的価値を自分のこととして深く受け止め、これからの生き方に発展させていくためには、補助発問が大事であることが分かった。補助発問をすることで、児童はさらに自分自身を深く見つめ、他の児童との交流の中で新たな価値に気づき、理解を深めることができた。中心発問や基本発問はもちろんだが、**児童の思いやこだわりを活かす補助発問も道徳的価値の自覚を深め、よりよい生き方を見つけ出していくのに、大事な発問の1つである。**

これらの発問を活かすためには、**児童の実態を把握**しておくことが、大事であることも分かった。児童の本音としてのつぶやき、こだわりを見逃さず拾いながら、授業に活かし展開させることで、児童一人一人が自己の内面を見つめることが出来る。道徳的価値の自覚を深め、自己の生き方としての考えを深めるためにも、**実態を把握し発問を構成することは大事である。**

補助発問



道徳的価値の自覚を深める

実態把握が重要

2 児童の変容から

図5は「道徳の時間、話を真剣に聞いているか」についての児童のアンケート結果であ

真剣に聞いている

思い、考えを話している

る。「聞いている」と答えた児童は、10月の60%から2月では、94%に増えている。授業に対する関心や意欲が向上したと考えられる。

図6は、「道徳の時間に自分の思ったことや考えたことを話したか」について児童のアンケート結果である。「話している」「まあまあ話している」と答えた児童が10月69%であるのに対し、2月は94%と変容が見られた。また、「あまり話していない」「話していない」と答えた児童10人（10月）と2人（2月）に対して話せない理由について書かせた結果が資料2である。10月の10人は、内容の理解に対する理由が多かったが、2月の2人は、内容の理解に対する理由はなかった。

資料の提示と発問の工夫が、意欲の向上や自分の内面を見つめ、思いや考えなどを出し合うことに効果があることが分かった。

以上のことから、教師が資料に応じた提示を工夫し、資料分析や児童の実態に応じた発問を工夫すると、児童が資料に対して興味・関心を持ち、内容を理解し、自分のこととしてとらえ、多様な思いや考え、悩みを出し合うことができることが分かった。資料の提示と発問の工夫をすることが、道徳の時間の指導の充実につながったといえる。

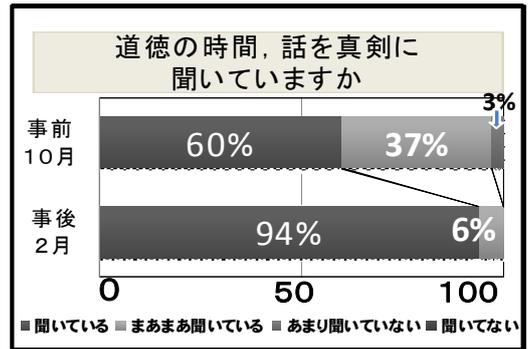


図5 話を聞いているか (32人)

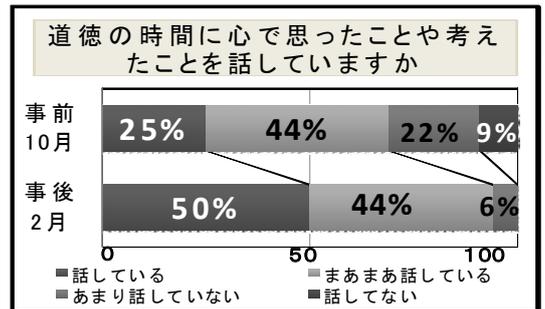
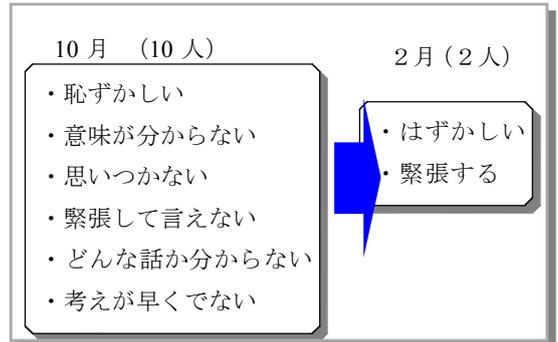


図6 自分の思い・考えを話しているか (32人)



資料2 話せない理由

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 視覚にうったえるような提示の方法や展開の仕方を工夫すると、児童は意欲的になり自分のこととして捉えることができることが分かった。
- (2) 児童の思いやこだわりを実態として把握し、児童のつぶやきやこだわりを活かした補助発問をすると、より深く内面を見つめることができ、道徳的価値の自覚が深まることが分かった。
- (3) 道徳の時間の指導の充実につながる工夫の中でも、特に資料の提示と発問の工夫が大事であると改めて感じた。

2 今後の課題

- (1) 他の資料の提示方法
- (2) 児童の実態を把握し、児童の反応を活かした発問の工夫

《主な参考文献》

文部科学省 編	『小学校学習指導要領解説 道徳編』	2008年
文部科学省 編	『心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開』	2002年
広瀬 久 著	『道徳的価値を深める発問の工夫』 明治図書	1999年

楠 茂宣 著

『よりよく生きる力を育てる道徳読み物資料集』東洋館出版 2008年